

飯田線新城駅へ到着した弾薬を洞窟へ運搬するのに、弾薬を木炭車に積むことは禁止されており、農家の牛車を総動員して運搬しましたが、牛では能率があがらず大変困りました。

時を同じくしてドラム缶いりのガソリンがつぎつぎと到着しました。当時のドラム缶は非常に鉄板がうすく新品の缶でも損傷して、ガソリンがもれて到着するものがあります。これではいたしかたなしと自動車会社へガソリンを支給すると話したら、何台もトラックを配車してくれ、滞貨も一掃することが出来ました。それほど自動車会社も燃料には相当困っていたようです。

本土空襲もはげしさをまし、造兵廠の生産能力もおり、行政本部から発送送票が来ても造兵廠から兵器が納入されないような事態になりました。帯剣のさやはなくとも剣身のみ支給するようになりまし。これでは物量をほこる米軍に勝てるはずはありません。

後日、進駐軍に兵器を引きわたすさいに私が現地を案内しましたが、弾薬が三千屯あるとつたえたら、いまだ日本にこんなに弾薬があったかと驚いておりました。

人間万事塞翁が馬

神奈川県 忍 足 諗

「おい、日本の船が来たぞー」

と叫ぶ友の声で、皆一斉に海の方角に目をやった。船腹に日の丸をえがいた船が、ゆっくりと近づいて来る。目をこらすと船首の船名がみえて来る。「雲仙丸」だ。夢にもみた全員待望の日本の船だ。皆こおどりせんばかりに近づくと船を凝視する。こんどこそ本当に祖国日本に帰れるぞ。涙で船体が霞んでみえる。私物は没収されると聞いていたので、入宮する時から肌身放さず身につけて来た神社、仏閣のお守札を焼くことにした。抑留後、身体検査のつど、マスコットだと説明すると、

「ダー・ダー」(同意)といってとりあげられなかったお札でしたが、帰国に際し没収されて、不敬なことをされては申しわけないと思ひもやすことに決め、たき火に入れました。燃える火を見つめていると、今までの出来

ことが走馬灯のように脳裏に浮かんで来ました。

新京の陸軍経理学校を二十年六月二十五日卒業、原隊の経理室にもどって一か月あまり、ソ連が滿州へ進攻して来ました。寧安にあった私達の第二航空通信連隊の近くの安達山や八巻山に烽火が上がり、連隊の衛兵が歩哨中、こつせんとゆくえ不明になることが頻発しました。

風雲急を上げるおり、経理室の柴田准尉の奥さんがお産をして動けなくなり、退避して無人となった官舎へ奥さん救出のため私と浦上等兵が急行しました。ありあわせの資材で担架をつくっていた時、磯田主計大尉がトラックで迎えに来られ、ソ連の戦車が牡丹江へ突入したといわれました。

原隊へもどりガソリンをつめたドラム缶を五本トラックに積みこみ、先発した連隊長のおられる新京へ向けただちに出発しました。中隊は展開して不在、材料廠の人は軍属の人をふくめて永井少佐がいんそつ、新京へむかいました。途中、准尉の奥さんを開拓団にあづけ、私達は教化にたどりつきました。

そこには我が連隊の第四中隊が駐屯していて、富永中

将のラジオ放送を聞きました。

「帝国は停戦協定を結んだ。余は諸子等と共に内地に帰る」

という内容でした。いよいよ終戦になったかと思うまもなくソ連兵がぞくぞくトラックで到着し武装解除。警戒兵曰く「ヤボンスキー・ダモイ東京」と叫び手で波の形(多分日本海を渡る仕草)をしてみせました。停戦協定では無く無条件降伏ではなかったかとはじめてさとりました。

行軍で牡丹江へ行き、そこから有蓋貨車に乗せられました。太陽の出る方向が変だと気づいた時はあとの祭で、貨車からおろされたところは早雪のふりしきるなか、縦の森林の向うに鉄塔がぼんやりみえるところでした。大きな集会所か倉庫のような建物に収容され、

「お前達は五年間の強制労働をするのだ」

といい渡され、シベリアでの地獄の生活が始まりました。まず自分達の収容されるラーゲルづくりです。ドイツ人の捕虜二人の指導で、言葉はわかりませんがみまねで丸木小屋のラーゲルをつくるのですが、私達が

持っていた高粱で粥をつくり、食べ残りが乾パンの空き缶についているのをドイツ兵が指でとり、食べているのを見て、私達の今後の生活を思い同情の念と同時に落胆しました。

森林のなかの私達のラーゲルはコムソモリスクの近くで零下五十五度になると聞かされました。極寒のため昼は手足の感覚はまったくなく、夜になると感覚がもどって痛くなり目がさめるといふ生活でした。ラーゲルが出来るまでのあいだは天幕での生活で、寒さをふせぐため天幕を二重にし天幕と天幕の間にモフ（ツンドラ地帯に生える苔の一種）という苔をつめました。当時はいまだ体力気力があり紙の代りに白樺の樹の皮をうすくはいて紙かわりにして単語カードをつくりソ連語をおぼえたものでした。

「空高く 北斗七星 凍りけり」

「凍る空 北斗七星 輝やけり」

「空腹に 凍り付く大地 雪夜かな」

「寒天に 月冴え渡り 故郷思う」

「シベリアに 名月冴えて 母懐う」

ラーゲルづくりの合間に暖房用の燃料にするため十数キロはなれたところにある丸木小屋をこわして丸太を運ぶ作業があり、運搬途中飢えと寒さのため三人の凍死者が出て、私は栄養失調で枯草をまたげず、つまづいてころぶありさまでした。

八月当時の装備のため防寒外套はなく、普通の外套に頭きんをかぶっての作業でしたので、耳や鼻が蠟のように白くなり、互いに注意しあって手袋で耳や鼻をこすって凍傷をふせいでいましたが、手足の感覚がないため私は自身の凍傷に気づかず、靴をぬいだとき足の凍傷を発見し、オカ（休養しながら軽労働をする収容所）と呼ばれていた収容所へ転属になり、最初の冬はかろうじて越すことができました。

「枯草に 転ぶ兵 我も又」

オカでは建設的な作業はなく、自分達が生きていくだけの生活でした。私はソ連人の家庭に派遣され雑用係でした。そこには書記だというガールとワールという二人の姉妹と六歳半のエーマという女の子がいました。昼間は二人の姉妹は仕事に出掛け、エーマと留守番をしなが

ら薪割や部屋の掃除とか家庭内の雑用をして、姉妹が帰宅するとラーゲルへ帰る毎日でした。エーマが腹痛のとき、母親は煉瓦をペーチカで暖めて布切れで包み、腹部を暖めるだけで医薬品はなかったようでした。便所もなく野外で用を足していました。しかし私が接したソ連人は個人的には皆おうようで、善良な感じを受けました。たまたま荒野にころがっていた機械を指して、「これはヤポンスキーのヤンマージゼルだ」とか、「お前は日本で何をしていたか」とか、クリスマスにはバザール（食品等生活必需品販売所）で食料を仕入れて来て、乾燥した月桂樹の葉で香りをつけた餃子のような物をつくり、自分達が食べるまえに私にとってくれたりしました。

凍傷がなおりオカから作業するラーゲルに移った時、先の女性書記が訪れてきて、エーマが亡くなったことを涙ながらに私につげ、私も悲しくなりもらい泣きをしながら慰める言葉もありませんでした（実は言葉が話せなかったこともありまし）。

ソ連の最大目的は抑留者を使って第二のシベリア鉄道（バイカル・アムール鉄道）をふせつすることだったの

です。鉄路のふせつは関東軍の鉄道隊を使用し、私達は鉄道建設に付ずいた種々の作業、路盤の整備、伐採、雪かき、道路づくり等で凍死者や餓死者の出る悪条件のもと、無報酬で、しかもわずかな食糧（ソ連人の話では独ソ戦でウクライナが破壊されて穀類がとれないのでソ連の人達も食糧難だと説明）で重労働をしいられたのでした。鉄道隊はノルマがあがるので四百五十グラムの大きな黒パンが支給され、私達はノルマが上がらないため三百二十グラム小さな黒パンが与えられました。線路は各ラーゲルを中心に東西に延伸し、隣のラーゲルからふせつされて来たレールと接続され、平坦なシベリア大陸に立派な広軌鉄道が建設されました。

「雪原に 鈍音高し バム鉄路」

「凍付きし 大地踏み締め 鉄路敷く」

「凍付くや バム鉄道の 線路敷く」

「伐採の音 遙かなり 雪吹ぶく」

「凍付きし 大地は拒む 鉄の杭」

「故郷で見し 十五夜の月 今ソ連」

シベリアは七、八月は良い気候ですが、六月と九月は

雨季で十月から翌年五月までは積雪で、樹木は白樺とクリスマスに使う樅の木だけでした。

作業するラーゲルでの生活は、各人は毛布を一枚づつ支給されていますので、二段ベッドの床に一枚を敷き、一枚を掛けて二人セットで寝るのです。しかし極寒のため太くならない白樺の丸太を敷いただけの床ですので、ゴツゴツして寝ごころは悪く、翌朝目をさますと隣の相手が冷たくなってしまったこともありました。亡くなった人は医務室（関東軍が使っていた嗽薬カマンガンサンカリだけで他の薬品は皆無）のまえに丸太を二本並べたうえに下着一枚にされて乗せられ、六、七人になるとソ連の兵隊が馬糞でどこかにはこんで行きました。私の感じではラーゲルにいた日本人は三分の一くらいは死んでしまったように思われました。部屋の照明は勿論なく缶詰のあき缶を利用し、なかに灯油を入れ開いている口の部分をつぶして間に細く切った毛布を差し込んだだけのもので、点火すると薄闇い光を出すのですが、油煙が立ちこめて翌朝黒い痰が出て肺が真っ黒になるのではないかと話しあいました。

灯油を照明がわりに使用したので顔が真っ黒になり、ソ連兵に「ヤボンスキーは不潔で顔も洗わないのか」といわれ、毎朝雪で顔をこしこすっていました。食器が無いのであき缶を二個つなげてほそながい食器をつくり、作業に出掛けるさいに食器と白樺でつくったサジや箸を腰にぶらさげ、洗濯をしないので油で光った衣服や靴下を身につけ、髭面の姿はまさに乞食とかわらなかつたと思います。風呂にはいれないのでシラミがわき、シラミは衣服をそとに出しておくのと凍死して、衣服をたたくとぼろぼろ落ちました。

生活習慣がことなつて困つたのは彼等がパンツをはかないことと用をたしたあと、おとし紙をつかわないことでした。パンツのかわりにシャツでおおっているようだし、また用を足したのち、お尻がよごれないのかもしれないと話しあいました。

パンツがないのは慣れましたが、おとし紙の方は被服係が布切れのはしを支給してくれました。また共同便所は最初野天に大きな穴を掘って使用していましたが、厳寒のため氷状となり臭気がなくてよいのですが、滑って

困りました。しばらくして十人が同時に使用出来る一列横隊に並んだ仕切りのない便所を作りました。落し穴は日本式の楕円形でなく、ソ連式の真丸形でした。外人は大、小便是別々にするので、あるいは同時に排せつできないため真丸形でよいのだそうです。

零下五十五度の気象条件下ではきびしいなかにも美しい面もあり、見渡す限りよごれない純白の銀世界のなか、雪面についた足跡の穴の色は空と同じブルーで、子供のころみた液体空気の色とまったく同じ綺麗な色でした。雪は湿気がなくフェルトの長靴をはくには便利で、部屋へはいる時に雪をはらえばそのままはいることが出来ました。しかし素手では金属にふれられないし、大地は鉄板のように凍って鉄杭も打ちこめないのです。

シベリアで私がみた動物は人と馬だけでした。ビタミンCの補給にと縦の葉をつけて六十度のお湯に漬けた松葉酒のような物を飲まされたり、ビタミンBの補給にと黒パンから作ったドロシーというドロドロしたすっぱい液体状のものを飲まされましたが、ビタミン不足や不潔のため疥癬や水虫になやまされました。

「蘭咲きし 関東軍の 面影何処」

「シベリアの 凍付く大地 友眠る」

「腰掛けし 岩の温みや 緑萌ゆ」

毎月、身体検査があり、栄養失調の一級、二級、三級、健康体の一級、二級、三級とランクがあり、栄養不良の者ももっとふとらせて帰国させる。健康体の者ももっと労働させる。健康体の三級の者から帰国させるということでした。

私は凍傷があるため越冬すると凍傷が悪化するからと三級にランクされ、丸二年後に帰国出来ました。私は満州にいたために空襲や激戦にあわなかったが、満州にいたためにシベリアに抑留され生死と隣合せの生活をよぎなくされました。また凍傷になったために最初の冬は重労働からまぬがれて無事越冬出来、比較的早期に帰国出来ました。人間の運命や吉凶は予測しがたく、災難が幸福になったり幸福が災難になったり、「真に人間の吉凶禍福はあざなえる縄の如し」です。